

校異源氏物語・てならひ

そのころよかはになにかしそうつかひひていたうとき人すみけりやそちあまりのは、五十はかりのいもうとありけりふるきくわんありてはつせにまうてたりけりむつまじうやむことなくおもふてしのあさをそへて仏経くやうすることをごなひけりこと、もおほくしてかへるみちにならさかといふ山こえける程よりこのは、のあま君心ちあしうしければかくてはいかてかのこりのみちをもおはしつかむともてさはきてうちのわたりにしりたりける人のいゑありけるにと、めてけふはかりやすめたてまつるになをいたうわつらへはよかはにせうそこしたり山こもりのほいふかくことしはいてしと思けれとかきりのさまなるおやのみちのそらにてなくやならむとおとろきていそき物し給へりおしむへくもあらぬ人さまを身つかからもてしのなかにもけむあるしてかちしさはくをいゑあるしき、てみたけさうし、けるをいたうおい給へる人をもくなやみ給ふはいか、とうしろめたけに思いていひければさもいふへきことそいとおしう思ていとせはくむつかしうもあれはやうくいてたてまつるへきになか、みふたかりてれいすみ給方はいむへかりければ故朱雀院の御両にてうちの院といひし所のわたりならむと思いて、院もりそうつしり給へりければ一二日やとらんといひにやり給へりければ、つせになんきのふみなまいりにけるとていとあやしきやともりのおきなをよひてゐてきたりおはしまさは、やいたつらなる院のしむ殿にこそ侍めれ物まうての人はつねにそやとり給といへはいとよかなりおほやけ所なれと人もなく心やすきをとてみせにやり給このおきな例もかくやとる人をみならひたりければおろそかなるしつらいなとしてきたりまつそうつわたり給いといたくあれておそろしけなる所かなとみ給大とこたち経よめなどの給このはつせにそひたりしあさりとおなしやうなるなにことのあるにかつきくしきほどのけらうほうしにひともさせて人もよらぬうしろのかたにいきたりもりかとみゆる木の下をうとましのわたりやとみいれたるにしろき物のひろこりたるそみゆるかれはなにそと立とまりてひをあかくなしてみればものゝゑたるすかたなりきつねのへんくゑしたるにくしみあらはさむとてひとりは今すこしあゆみよるいまひとりはあるやうなよからぬものならむといひてさやうの物

しりそくへきいんをつくりつゝ、さすかに猶まもるかしろのかみあらはふとりぬへき心ちするに此ひともしたる大とこは、かりもなくあふなきさまにてちかくよりてそのさまをみればかみはなかくつや／＼としておほきなる木のいとあら／＼しきによりぬていみじうなくめつらしきことにも侍かなそうつの御坊に御らむせさせたてまつらはやといへはけにあやしきことなりとて一人はまうて、かゝる事なむと申すきつねの人にへんくゑするとはむかしよりきけとまたみぬもの也とてわさとおりておはすかのわたり給はんとする事によりてけすともみなはか／＼しきはみつし所なとあるへかしきことゝもをかゝるわたりにはいそく物なりければあしつまりなとしたるにたゝ四五人してこゝなる物をみるにかはることもなしあやしうて時のうつるまてみるとく夜もあけはてなん人かなにそとみあらはさむと心にさるへきしんこむをよみいんをつくりて心みるにしくや思らんこれは人なりさらにひさうのけしからぬ物にあらすよりてとへなくなりたる人にはあらぬにこそあめれもしゝにたりける人をすてたりけるかよみかへりたるかといふなにのさる人をかこの院のうちにすて侍らむたとひまことに人なりともきつねこたまやうの物のあさむきてとりもてきたるにこそ侍らめとふひんにも侍けるかなけからひあるへき所にこそ侍へめれといひてありつるやとりのをのこをよふ山ひこのこたふるもいとおそろしあやしのさまにひたいおしあけていてきたりこゝにはわかき女などやすみ給かゝることなんあるとてみすればきつねのつかうまつるなりこの木のもとになん時ゝあやしきわさなむし侍をとゝしの秋もこゝに侍人のこの二はかりにはへしをとりてまうてきたりしかとみをとるかすはへりきさて其ちこはしにやしにしといへはいきて侍りきつねはさこそは人を、ひやかせとことにもあらぬやつといふさまいとなれたりかのよふかきまいりものゝ所に心をよせたるなるへしそうつさらはさやうの物のしたるわさか猶よくみよとて此ものをちせぬ法しをよせたれはおにか神かきつねかこたまかゝはかりのあめのしたのけんさのおはしますにはえかくれたてまつらしなのり給へ／＼ときぬをとりてひけはかほをひきいれていよ／＼なくいてあなさかなのこたまのおにやまさにかくれなんやといひつゝかほをみるとするに昔ありけむめもはなまかりけるめおにゝやあらんとむくつけきをたのもしういかきさまを人にみせむと思てきぬをひきぬかせんとすれはうつふしでこゑたつばかりなくなにゝまれかくあやしきことなへて世にあらしとてみはてんと思に雨いたくふりぬへしかくてをいたらはしにはて侍ぬへしかきのもとにこそいたさめといふそうつまことの人のかたちなりその命たえぬをみる／＼

すてんこといといみしきことなり池にをよくいを山になくしかをたに人にとらへられてしなむとするをみてたすけさらむはいとかなしかるへし人の命ひさしかるましき物なれとのこりの命一二日をもおしますはあるへからすおに、もかみにもりようせられ人をはれ人にはかりこたれてもこれよこさまのしにをすへき物にこそあんめれ仏のかならず、くひ給へき、はなりなを心みにしはしゆをのませなとしてたすけ心みむつゐにしないふかきりにあらずとの給てこの大とこしていきれさせ給ふをてしといたい／＼しきわさかないたうわつらひ給人の御あたりによからぬ物をとりいれてけからひかならずいてきなんとすともとくもあり又物のへんくゑにもあれめにみす／＼いける人をかゝるあめにうちうしなはせんはいみしきことなれはなと心／＼にいふ下すなとはいとさばかり物をつたていひなす物なれば人さはかしからぬかくれのかたになんふせたりける御車よせており給程いたうくるしかり給とてのゝしるすこし、つまりてそうつありつる人いかゝなりぬるとゝひ給なよく／＼として物いはすいきもし侍らすなにか物にけとられにける人にこそといふをいもうとのあま君き、給て何事そとゝふしか／＼のことなむ六十にあまるとしめつらかなる物をみ給へつるとの給うちきくまゝにをのかてらにてみし夢ありきいかやうなる人そまつそのさまみとなきての給たゝこのひむかしのやりとになん侍はや御覽せよといへはいそきゆきてみるに人もよりつかてそすておきたりけるいとわかうゝつくしけなる女のしろきあやのきぬひとかさねくれなひのはかまそきたるかはいみしうかうはしくてあてなるけはひかきりなしたゝ我恋かなしむゝすめのかへりおはしたるなめりとてなく／＼こたちをいたしていきれさすいかなりつらむともありさまみぬ人はおそろしからていたきいれつийけるやうにもあらてさすかにめをほのかにみあけたるに物のたまへやいかなる人かゝくては物し給へるといへとものおほえぬさま也ゆとりてゝつからすくひいれなとするにたゝよりはりにたえいるやうなりければ中／＼いみしきわさかなとてこの人なくなりぬへしかちし給へとけんさのあさりにいふされはこそあやしき御ものあつかひとはいへとかみなとのために経よみつゝいのるそうつもさしのそきていかにそなにのしわさそとよくてうしてとへとの給へといよはけにきえもていくやうなれはいき侍らしすそなるけからひにこもりてわつらふへきことさすかにいとやむことなき人にこそ侍めれしにはつともたゝにやはすてさせ給はんみくるしきわさかなといひあへりあなかま人にきかすなわつらはしきこともそあるなとくちかためつゝあま君はおやのわつらひ給よりも此人をいけはてゝみまほし

うおしみてうちつけにそひるたりしらぬ人なれとみめのこよなうおかしけなれ
はいたつらになさしとみるかきりあつかひさはきけりさすかに時々めみあけな
としつゝ涙のつきせすなかるゝをあな心うやいみしくかなしと思ふ人のかはり
にほとけのみちひき給へると思ひきこゆるをかひなくなり給はゝ中／＼なるこ
とをや思はんさるへき契にてこそかくみたてまつらめ猶いさゝか物の給へとい
ひつゝくれとからうしていきいてたりともあやしきふようの人なり人にみせて
よるこのかはにおとしいれ給てよといきのしたにいふまれ／＼物の給をうれし
とおもふにあないみしやいかなれはかくはの給そいかにしてさるところにはお
はしつるそとゝへとも物もいはすなりぬ身にもしきすなどやあらんとてみれと
こゝはとみゆる所なくうつくしければあさましくかなしくまことに人の心まど
はさむとていてきたるかりの物にやとうたかふ二日はかりこもりゐてふたりの
人をいのりかちするこゑたえすあやしきことを思さはくそのわたりのけすなど
のそうつにつかまつりけるかくておはしますなりとてとふらひいてくるも物語
などとしていふをきけは古八の宮の御むすめ右大将とのゝかよひ給しことになや
み給こともなくてはかにかくれ給へりとしてさはき侍その御さうさうのさうし
ともつかうまつり侍りとて昨日はえまいり侍らさりしといふさやうの人の玉し
るをおにのとりもてきたるにやと思にもかつみる／＼ある物ともおほえすあや
うくおそろしとおほす人ゝよへみやられしひはしかこと／＼しきけしきもみえ
さりしをといふことさら事そきていかめしうも侍らさりしといふけからひたる
ひとゝてたちなからをいかへしつ大將殿は宮の御むすめち給へりしはうせ給
てとしころになりぬる物をたれをいふにかあらんひめ宮をゝきたてまつり給て
よにこと心おはせしなといふあま君よろしくなり給ぬかたもあきぬれはかくう
たてある所にひさしうおはせんもひんなしとてかへる此人は猶いとよはけなり
みちの程もいかゝ物し給はんと心くるしきことゝいひあへり車ふたつしておい
人のり給へるにはつかうまつるあまふたりつきのにはこの人をふせてかたはら
に今ひとりのりそひてみちすから行もやらすくるまどめてゆまいりなとし給ひ
えさかもとにをのといふ所にそすみ給けるそこにおはしつくほといとゝをし中
やとりをまうくへかりけるなといひて夜ふけておはしつきぬそうつはおやをあ
つかひむすめのあま君はこのしらぬ人をはくゝみてみないたきおろしつゝやす
む老のやまいのいつともなきかくるしと思給へしとを道のなこりこそしはしわ
つらひ給けれやうやうよろしうなり給にければそうつはのほり給ぬかゝる人な
んゐてきたるなとほうしのあたりにはよからぬことなれはみさりし人にはまね

はすあま君もみなくちかためさせつゝもしたつねくる人もやあると思もしつ心
なしいかてさるゑなかな人のすむあたりにかゝる人おちあふれけん物まうてなど
したりける人の心ちなとわつらひけんをまゝはゝなどやうの人のたはかりてお
かせたるにやなどと思よりける河になかしてよといひしひとことよりほかに物
もさらにの給はねはいとおほつかなく思ていつしか人にもなしてみると思につ
くくとしておきあかるよもなくいとあやしうのみ物し給へはつるにいくまし
き人にやと思なからうちすてむもいとおしういみし夢かたりもしいてゝはしめ
よりいのらせしあさりにもしのひやかにけしやくことせさせ給うちはへかくあ
つかふほとに四五月もすぎぬいとわひしうかひなきことを思わひてそうつの御
もとに猶おり給へこの人たすけ給へさすかにけふまでもあるはしぬましかりけ
る人をつきしみ両したる物のさらぬにこそあめれあか仏京にいて給はゝこそは
あらめこゝまてはあへなんなといみしきことをかきつゝけてたてまつり給へれ
はいとあやしきことかなかくまでもありける人の命をやかてとりすてゝましか
はさるへき契ありてこそはわれしもみつゝめ心みにたすけはてむかしそれに
とゝまらすはこうつきにけりと思はんとており給けりよろこひおかみて月比の
有さまをかたるかく久しうわつらふ人はむつかしきことをのつからあるへきを
いさゝかおとろへすいときよけにねちけたる所なくのみ物し給てかきりとみえ
なからもかくていきたるわさなりけりなとおほなくなくの給へはみつゝ
しよりめつらかなる人のみありさまかないてとてさしのそきてみ給てけにいと
きやうさくなりける人の御ようめいかなくとくのむくひにこそかゝるかたち
もおひいて給けめいかなるたかひめにてそこなはれ給けんもしさにやときゝあ
はせらるゝ事もなしやとゝひ給ふさらにきこゆることもなしなにかはつせのく
わんをむの給へる人なりとの給へはなにかそれえんにしたかひてこそみちひき
給はめたねなきことはいかてかなとの給かあやしかり給てすほうはしめたりお
ほやけのめしにたにしたかはすふかくこもりたる山をいて給てすそろにかゝる
人のためになむをこなひさはき給と物のきこえあらんときゝにくかるへしと
おほし弟子ともゝいひて人にきかせしとかくすそうついてあなかま大とこたち
われむさんのほうしにていむことの中にやふるかいはおほからめと女のすちに
つけてまたそしりとらすあやまつことなし六十にあまりて今さらに人のもとき
おはむはさるへきにこそはあらめとの給へはよからぬ人の物をひんなくいひな
し侍時には仏ほうのきすとなり侍こと也と心よからす思ていふこのすほうのほ
とにしるしみえすはといみしきことゝもをちかひ給てよひとよかちし給へるあ

かつきに人にかりうつしてなにやうのものかくひとをまとはしたるそと有さま
はかりいはせまほしうて弟子のあざりとく／＼にかちし給月比いさゝかもあら
はれさりつる物のけてうせられてをのれはこゝまてまうてきてかくてうせられ
たてまつるへき身にもあらすむかしはをこなひせし法しのいさゝかなる世にう
らみをとゝめてたゝよひありきしほとによき女のあまたすみ給し所にすみつき
てかたへはうしなひてしにこの人は心と世を恨給てわれいかてしなんといふこ
とをよるひるの給しにたよりをえていとくらき夜ひとり物し給しをとりてしな
りされとくわんおんとさまかうさまにはくゝみ給ければ此そうつにまけたてま
つりぬ今はまかりなんとゝしるかくいふはなにそとゝへはつきたる人物はか
なきけにやはかはかしうもいはすさうしみの心ちはさはやかにいさゝかものお
ほえてみまはしたれはひとりみし人のかほはなくてみなおいほうしゆかみおと
ろへたる物のみおほかれはしらぬくにゝきにける心ちしていとかなしありしよ
のこと思いつれとすみけむ所たれといひし人とたにたしかにはかく／＼しうもお
ほえすたゝわれはかきりとて身をなけし人そかしいづくにきにたるにかとせめ
て思いつれはいといみしとものを思なきてみな人のねたりしにつまとをはな
ちていたりしに風はけしう河浪もあらふきこえしをひとり物おそろしかり
しかはきしかたゆくさきもおほえてすのこのはしにあしをさしおろしなから行
へきかたもまとはれてかへりいらむもなかそらにて心つよく此世にうせなんと
思たちしをおこかましうて人にみつけれむよりはおにもなにもくいうしなへ
といひつゝつく／＼とあたりしをいときよけなるおとこのよりきていさ給へを
のかもとへといひていたく心ちのせしを宮ときこえし人のしたまふとおほえし
程より心ちまとひにけるなめりしらぬ所にすゑをきて此男はきえうせぬとみし
をつるにかくほいのこともせすなりぬると思つゝいみしうなくと思しほどにそ
の後のことはたえていかにもく／＼おほえす人のいふをきけはおほくの日比もへ
にけりいかにうきさまをしらぬ人にあつかはれみえつらんとはつかしうつるに
かくていきかへりぬるかと思ふもくちおしければいみしうおほえて中／＼しつ
み給ひつる日比はうつし心もなきさまにて物いさゝかまいることもありつるを
露許のゆをたにまいらすいかなれはかくたのもしけなくのみはおはするそうち
はへぬるみなとし給へることはさめ給てさはやかにみえ給へはうれしう思きこ
ゆるをとなく／＼たゆむおりなくそひゐてあつかひきこえ給ある人ゝもあたら
しき御さまかたちをみれば心をつくしてそおしみまもりける心には猶いかてし
なんとそ思わたり給へときはかりにていきとまりたる人の命なれはいというね

くてやう／＼かしらもたけ給へは物まいりなとし給にそ中／＼おもやせもてい
くいつしかとうれしう思きこゆるにあまになし給てよさてのみなんいくやうも
あるへきとのたまへはいとおしけなる御さまをいかてかさはなしたてまつらむ
とてたゝいたゝき許をそき五かいはかりをうけさせたてまつる心もとなけれと
もとよりおれ／＼しき人の心にてえさかしくしるてももの給はすそうつは今ほか
はかりにていたはりやめたてまつり給へといひをきてのほり給ぬ夢のやうなる
人をみたてまつる哉とあま君はよろこひてせめておこしすゑつゝ御くしてつか
らけつり給さはかりあさましうひきゆひてうちやりたりつれといたうもみたれ
すときはてたれはつや／＼とけうらなり一とせたらぬつくもかみおほかる所に
てめもあやにいみしき天人のあまくたれるをみたらむやうに思ふもあやうき心
ちすれとなとかいと心うくかはかりいみしく思きこゆるに御心をたてゝはみえ
給いつくにたれときこえし人のさる所にはいかておはせしそとせめてとふをい
とはつかしと思てあやしかりしほどにみなわすれたるにやあらむありけんさま
などもさらにおほえ侍すたゝほのかに思いつることゝてはたゝいかてこの世に
あらしと思つゝ夕暮ことにはしちかくてなかめし程にまへちかくおほきなる木
のありししたより人のいてきてゐていく心ちなむせしそれより外のこととはわれ
なからたれともえ思いてられ侍すといとらうたけにいひなして世中になをあり
けりといかて人にしられしきゝつくる人もあらはいといみしくこそとてない給
あまりとふをはくるしとおほしたれはえとはすかくやひめをみつたりけんた
けとりのおきなよりもめつらしき心ちするにいかなる物のひまにきえうせんと
すらむとしつ心なくそおほしける此あるしもあてなる人なりけりむすめのあま
君はかむたちめの北のかたにてありけるかその人なく成給て後むすめたゝひと
りをいみしくかしつきてよききむたちをむこにして思あつかひけるをそのむす
めの君のなくなりにはければ心うしいみしと思いりてかたちをもかへかゝる山さ
とにはすみはしめたりける也夜とゝもにこひわたる人のかたみにも思よそへつ
へからむ人をたにみいてゝしかなつれ／＼も心ほそきまゝに思なけきけるをか
くおほえぬ人のかたちけはひもまさりさまなるをえたれはうつゝのことゝもお
ほえすあやしき心ちしなからうれしと思ねひにたれといときよけによしありて
有さまもあてはかなりむかしの山さよりは水のをとみなこやかなりつくりさ
まゆへある所こたちおもしろくせむさいもおかしくゆへをつくしたり秋になり
行は空のけしきもあはれなり門田のいねかるとて所につけたる物まねひしつゝ
わかき女ともはうたうたひけうしあへりひたひきならすをともおかしくみしあ

つまちのことなとも思ひいてられてかの夕きりの宮す所のおはせし山里よりは
今すこしりて山にかたかけたる家なれはまつかせしけく風の音もいと心ほそ
きにつれ／＼にをこなひをのみしつゝいつとなくしめやかなりあま君そつきな
とあかきよはきむなとひき給少将のあま君などいふ人はひはひきなとしつゝあ
そふかゝるわさはし給やつれ／＼なるになといふむかしもあやしかりける身に
て心のとかにさやうの事すへき程もなかりしかはいさゝかおかしきさまならず
もおひいてにける哉とかくさたすきにける人の心をやるめるおり／＼につけて
は思ひいつるをあさましく物はかなかりけるとわれなからくちおしければてな
らひに

身をなけし涙の河のはやき瀬をしからみかけてたれかとゝめし思の外に心

うければ行すゑもうしろめたくうとましまて思やらる月のあかき夜な／＼お
い人ともはえむに歌よみにしゑ思いてつゝさま／＼物かたりなとするにいら
ふへきかたもなければつく／＼と打なかめて

われかくてうき世の中にめくるともたれかはしらむ月の都に今はかきりと

思し程は恋しき人おほかりしかとこと人ゝはさしもおもひいてられすたゝおや
いかにまとひ給けんめのとよろつにいかて人なみ／＼になさむと思いられしを
いかにあえなき心ちしけんいつくにあらむわれよにある物とはいかてかしらむ
おなし心なる人もなかりしまゝによろつへたつることなくかたらひみなれたり
し右近なともおり／＼は思いてらるわかき人のかゝる山里に今はと思たえこも
るはかたきわさなりければたゝいたく年へにけるあま七八人そつねの人にては
ありけるそれらかむすめむまこやうの物とも京に宮つかへするもことさまにて
あるも時／＼そきかよひけるかやうの人につけてみしわたりにいきかよひをの
つからよにありけりとたれにも／＼きかれたてまつらむこといみしくはつかし
かるへしいかなるさまにてさすらへけんなど思やりよつかすあやしかるへきを
思へはかゝる人ゝにかけてもみえすたゝしゝうこもきとてあま君のわか人にし
たりけるふたりをのみそ此御かたにいひわけたりけるみめも心さまもむかしみ
し宮ことりにゝたるはなしなにことにつけても世中にあらぬ所はこれにやとそ
かつは思なされけるかくのみ人にしられしとのひ給へはまことにわつらはし
かるへきゆへある人にも物し給らんとてくはしきことある人ゝにもしらせすあ
ま君のむかしのむこの君今は中将にて物し給けるおとうとのせんしの君そうつ
の御もとに物し給ける山こもりしたるをとふらひにはらからのきみたちつねに
のほりけりよ川にかよふみちのたよりによせて中将こゝにおはしたりさきうち

をひてあてやかなるおとこのいりくるをみいたしてしのひやかにおはせし人の御さまけはひそさやかに思いてらるゝ、これもいと心ほそきすまゐのつれくゝなれとすみつきたる人ゝは物きよけにおかしうしなしてかきほにうへたるなてしこもおもしろくをみなへしき経などさきはしめたるに色ゝのかりきぬすかたのをのこともわかきあまたして君もおなしさうそくにてみなみをもてによひすへたれはうちなかめてゐたりとし廿七八の程にてねひとゝのひちなからぬさまもてつけたりあま君さうしくちにき丁たてゝたいめんし給まつうちなきて年ころのつもるにはすきにし方いとゝけとをくのみなん侍へるを山さとのひかりに猶まちきこえさすることのうちわすれすやみ侍らぬをかつはあやしく思給ふるとの給へは心のうちあはれにすきにし方のことゝも思給へられぬおりなきをあなかにすみはなれかほなる御ありさまにをこたりつゝなん山こもりもうら山しうつねにいてたち侍をおなしくはなとしたひまとはさるゝ人ゝにさまたけらるゝやうに侍てなんけふはみなはふきすてゝ物し給へるとの給山こもりの御うらやみは中くゝいまやうたちたる御物まねひになむゝかしをおほしわすれぬ御心はへもよになひかせ給はさりけるとをろかならず思給へらるゝおりおほくなといふ人ゝに水はなんとやうの物くはせ君にもはすのみなとやうの物いたしたれはなれにしあたりにてさやうのこともつゝみなき心ちしてむら雨のふりいつるにとめられて物かたりしめやかにし給いふかひなく成にし人よりも此君の御心はへなとのいと思やうなりしをよその物に思なしたるなんいとかなしきなと忘かたみをたにとゝめ給はすなりにけんと恋しのふ心なりければたまさかにかく物し給へるにつけてもめつらしくあはれにおほゆへかめるとはすかたりもしいてつへしひめ君はわれは我と思いつる方おほくてなかめいたし給へるさまいとうつくししろきひとへのいとなさけなくあさやきたるにはかまもひはた色にならひたるにやひかりもみえすぐろきをきせたてまつりたれはかゝることゝもゝみしにはかはりてあやしうもあるかなと思つゝこはくゝしういらゝきたる物ともき給へるしもいとおかしきすかたなり御まへなる人ゝこひめ君のおはしたる心ちのみし侍つるに中将殿をさへみたてまつれはいとあはれにこそおなしくは昔のさまにておはしまさせはいとよき御あはひならむかしといひあへるをあないみしや世にありていかにもいかにも人にみえんこそゝれにつけてそむかしのこと思いてらるへきさやうのすちは思たえてわすれなと思あま君いり給へるまにまらうとあめのけしきをみわつらひて少将といひし人のこゑをきゝしりてよひよせ給へり昔みし人ゝはみなこゝに物せらるらんやと思ひなからも

かうまいりくることもかたくなりたるを心あさきにやたれもたれもみなし給らんなどの給つかうまつりなれにし人にてあはれなりし昔のことゝも、思いてたるつゐてにかのらうのつまいりつる程風のさはかしかりつるまきれにすたれのひまよりなへてのさまにはあるましかりつる人のうちたれかみのみえつるはよをそむき給へるあたりにたれそなんみおとろかれつるとの給姫君のたちいて給へるうしろてをみ給へりけるなめりとおもひいてゝましてこまかにみせたらは心とまり給なんかしむかし人はいとこよなうをとり給へりしをたにまた忘れたくし給めるをと心ひとつに思てすきにし御ことをわすれかたくなくさめかね給めりし程におほえぬ人をえたてまつり給てあけ暮のみ物に思きこえ給めるをうちとけ給へる御有さまをいかで御らんしつらんといふかゝることこそはありけれとおかしくてなに人ならむけにいとおかしかりつとほのかなりつるを中く思いつこまかにとへとそのまゝにもいはすをのつからきこしめしてんどのみいへはうちつけにとひ尋むもさまあしき心ちして雨もやみぬ日も暮ぬへしといふにそゝのかされて出給まへちかきをみなへしをおりてなにゝほふらんとくちすさひてひとりこちたてり人の物いひをさすかにおほしとかむることなどこたいの人ともは物めてをしあへりいときよけにあらまほしくもねひまさり給にけるかなおなしくは昔のやうにてもみたてまつらはやとてとう中納言の御あたりにとはたえすかよひ給やうなれと心もとゝめ給はすおやの殿かちになん物し給とこそいふなれとあま君もの給て心うく物をのみおほしへたてたるなむいとしらき今は猶さるへきなめりとおほしなしてはれくもてなし給へこの五とせむとせ時のまも忘す恋しくかなしと思つる人のうへもかくみたてまつりて後よりはこよなく思わすれにて侍思きこえ給へき人ゝ世におはすとも今は世になき物にこそやうくおほしなりぬらめよろつのことさしあたりたるやうにはえしもあらぬわさになむといふにつけてもいとゝ涙くみてへたてきこゆる心は侍らねとあやしうていき返ける程によろつのこと夢の世にたとられてあらぬ世に生れたらん人はかゝる心ちやすらんとおほえ侍れは今知へき人よにあらんとも思ひ出すひたみちにこそむつましく思きこゆれとの給さまもけになに心なくうつくしくうちゑみてそまもり給へる中将は山におはしつきて僧都もめつらしかりて世中の物語し給ふその夜はとまりてこゑたうとき人に経なとよませて夜ひとよあそひ給せむしの君こまかなる物かたりなとするつゐてにをのに立よりて物あはれにも有しかな世をすてたれと猶さはかりの心はせある人はかたうこそなとあるつゐてに風の吹あけたりつるひまよりかみいとなかくおかしけな

る人こそみえつれあらはなりと思つらんたちてあなたにいりつるうしろてなへての人とはみえさりつさやうの所によき女はをきたるましき物にこそあめれあけ暮みる物はほうしなりをのつからめなれておほゆらんふひんなることそかしとの給せんしの君この春はつせにまうて、あやしくてみいてたる人となむきゝ侍しとてみぬことなれはこまかにはいはずあはれなりけること哉いかなる人にかあらむ世中をうしとてそさる所にはかくれるけむかし昔物かたりの心ちもするかなとの給又の日かへり給にもすきかたくなむとておはしたりさるへき心つかひしたりければ昔おもひいてたる御まかなひの少将のあまなとも袖くちさまことなれともおかしいと、いやめにあま君は物し給物かたりのつゐてにしのひたるさまに物し給らんはたれにかと、ひ給わつらはしけれとほのかにもみつけてけるをかくしかほならむもあやしとてわすれわひ侍ていと、つみふかうのみおほえ侍つるなくさめにこの月ころみ給ふる人になむいかなるにかいと物思しけきさまにてよにありと人にしられんことをくるしけに思て物せらるればかゝるたにのそこにはたれかは尋きかんと思つゝ侍をいかてかはきゝあらはさせ給へらんといらふうちつけ心ありてまいりこむにたに山ふかきみちのかことはきこえつへしましておほしよそふらんかたにつけてはことゝにへたて給ましきことにこそはいかなるすちに世をうらみ給人にかなくさめきこえはやなどゆかしけにの給いて給とてたゝうかみに

あたしのゝ風になひくなをみなへしわれしめゆはんみち遠くともとかきて少将のあましていれたりあま君もみ給て此御返かゝせ給へいと心にくきけつき給へる人なれはうしろめたくもあらしとそゝのかせはいとあやしきてをはいかてかとしてさらにきゝ給はねははしたなきことなりとてあま君きこえさせつるやうによつかす人にゝぬひとにてなむ

うつしうへて思みたれぬをみなへしうき世をそむく草の庵にとありこたみはさもありぬへしと思ゆるしてかへりぬふみなとわさとやらんはさすかにうひくゝしうほのかにみしさまは忘す物思ふらんすちなにことゝしらねとあはれなれは八月十余日のほとにこたかかりのついでにおはしたり例のあまよひいて、ひとめみしよりしつ心なくてなむとの給へりいらへ給へくもあらねはあま君まつちの山となんみ給ふるといひいたし給たいめんし給へるにも心くるしきさまにて物し給ときゝ侍し人の御うへなんのこりゆかしく侍つるなにことも心になはぬ心ちのみし侍れは山すみもし侍らまほしき心ありなからゆるい給ましき人々におもひさはりてなむすくし侍よに心ちよけなる人のうへはかくくんした

る人の心からにやふさはしからすなん物思給らん人に思ことをきこえはやなと
いと心とゝめたるさまにかたらひ給心ちよけならぬ御ねかひはきこえかはし給
はんにつきなからぬさまになむみえ侍れと例の人にてはあらしとうたゝあ
るまで世をうらみ給めれはのこりすくなきよはひとまたに今はとそむきはへる
時はいと物心ほそくおほえ侍し物を世をこめたるさかりにはつゐにいかゝとな
んみ給へ侍とおやかりていふいりてもなさけなし猶いさゝかにてもきこえ給へ
かゝる御すまひはすゝろなることもあはれしこそ世のつねのことなれなとこ
しらへてもいへと人に物きこゆらん方もしらすなにこともいふかひなくのみこ
そといとつれなくてふし給へりまらうとはいつらあな心うあきを契れるはずか
し給にこそ有けれなと恨みつゝ

松虫のこゑをたつねてきつれともまた萩はらの露にまとひぬあないとおし
これをたになとせむれはさやうによついたらむこといひいてんもいと心うく又
いひそめてはかやうのおりくゝにせめられむもむつかしうおほゆれはいらへを
たにしたまはねはあまりいふかひなく思あへりあま君はやうはいまめきたる人
にそありけるなこりなるへし

秋の野ゝ露わけきたるかり衣むくらしけれる宿にかこつとなんわつらは
しかりきこえ給めるといふをうちにも猶かく心より外によにありとしられはし
むるをいとくるしとおほす心のうちをはしらておとこ君をもあかす思いてつゝ
恋わたる人くなれはかくはかなきつゐてにもうちかたらひきこえ給はん心よ
り外によにうしろめたくはみえ給はぬ物をよのつねなるすちにはおほしかけす
ともなさけなからぬ程に御いらへはかりはきこえ給へかしなとひきうこかしつ
へくいふさすかにかゝるこたいの心ともにはありつかすいまめきつゝこしおれ
歌このましけにわかやくけしきともはいとうしろめたうおほゆかきりなくうき
身なりけりとみはてゝし命さへあさましうなかくていかなるさまにさすらふへ
きならむひたふるになき物と人にみきゝすてられてもやみなはやと思ひふし給
へるに中将は大かた物思はしきことのあるにやいといったう打なけきしのひやか
にふゑをふきならしてしかのなくねになとひとりこつけはひまことに心ちなく
はあるましすきにし方の思いてらるゝにも中く心つくしに今はしめてあはれ
とおほすへき人はたかたけなれはみえぬ山ちにもえ思なすましようなんとうらめ
しけにていてなむとするにあま君なとあたらずを御らんしさしつるとてあさり
いて給へりなにかをちなるさとも心み侍れはなといひすさみていたうすきかま
しからもさすかにひんなしいとほのかにみえしさまのめとまりしはかりつれ

くくなる心なくさめに思出つるをあまりもてはなれおくふかなるけはひも所の
さまにあはすさまじと思へはかへりなむとするをふえのねさへあかすいと、
おほえて

ふかき夜の月をあはれとみぬ人や山のはちかき宿にとまらぬとなまかたは
なることをかくなんきこえ給ふといふに心ときめきして

山のはに入まて月をなかめみんなの板まもしるしありやとなといふにこ

のおほあま君ふえのねをほのかにきゝつきたりければさすかにめてゝいてきた
りこゝかしこうちしはふきあさましきわなゝきこゑにて中くむかしのことな
ともかけていはすたれとも思わかぬなるへしいてそのきむのことひき給へよこ
ふえは月にはいとおかしき物そかしいつらこたちことゝりてまいれといふにそ
れなめりとをしはかりにきけといかなる所にかゝる人いかてこもりゐたらむさ
ためなき世そこれにつけてあはれなるはんしきてうをいとおかしうふきていつ
らさらはとのたまふむすめあま君これもよき程のすき物にてむかしきゝ侍しよ
りもこよなくおほえ侍は山風をのみきゝなれ侍にけるみゝからにやとていてや
これもひかことに成て侍らむといひなからひくいまやうはおさくゝなへての人
の今はこのます成行物なれは中くめつらしくあはれにきこゆ松風もいとよく
もてはやすふきてあはせたるふえのねに月もかよひてすめる心ちすれはいよ
くめてられてよるまとひもせずおきゐたり女はむかしはあつまことをこそは
こともなくひきはへりしかと今のよにはかはりにたるにやあらむこのそうつの
きゝにくし念仏より外のあたわさなせそとはしたなめられしかはなにかはとて
ひき侍らぬなりさるはいとよくなることも侍りといひつゝけていとひかまほし
と思たれはいとしのひやかにうちわらひていとあやしきことをもせいしきこえ
給けるそうつかなくらくといふなる所にはほさつなどもみなかゝることをし
て天人などもまひあそふこそたうとかなれをこなひまきれつみうへきことかは
こよひきゝ侍らはやとすかせはいとよしと思ていてとのもりのくそあつまとり
てといふにもしはふきはたえす人々はみくるしと思へとそうつをさへうらめし
けにうれへていひきかすれはいとおしくてまかせたりとりよせてたゝ今のふえ
のねをもたつねすたゝをのか心をやりてあつまのしらへをつまさはやかにしら
ふみなこと物はこゑをやめつるをこれのみめてたると思てたけふちゝりくゝ
たりたんなゝとかきかへしはやりかにひきたることはともわりなくふるめきた
りいとおかしう今の世にきこえぬことはこそはひき給けれとほむれはみゝほの
くゝしくかたはらなる人にとひきゝていまやうのわかき人はかやうなることを

そのまれさりけるこゝに月ころ物し給める姫君かたちいとけうらに物し給め
れともはらかやうなるあたわきなどし給はすうもれてなん物し給めると我かし
こにうちあさわらひてかたるをあま君などはかたはらいたしとおほすこれにこ
とみなさめてかへり給程も山おろし吹てきこえるふえのねいとおかしうきこ
えておきあかしたるつとめてよへはかた／＼心みたれ侍しかはいそきまかて侍
し

わすられぬ昔のこともふえ竹のつらきふしにもねそなけれける猶すこしお
ほししるはかりをしへなさせ給へしのはれぬへくはすき／＼しきまでもなにか
はとあるをいとゝわひたるは涙とゝめかたけなるけしきにてかき給ふ

笛のねに昔のこともしのはれてかへりし程も袖そぬれにしあやしう物思ひ
しらぬにやとまてみ侍ありさまはおい人のとはすかたりにきこしめしけむかし
とありめつらしからぬもみ所なき心ちしてうちをかれけんおきのはにをとらぬ
ほと／＼にをとつれわたるいとむつかしうもあるかな人の心はあなかななる物
なりけりとみしりにしおり／＼もやう／＼思いつるまゝに猶かゝるすちのこと
ひとにも思はなたすへきさまにとくなし給てよとて経ならいてよみ給心のうち
にもねんし給へりかくよろつにつけて世中を思すつれはわかき人とおかしや
かなることもことになくむすほゝれたる本上なめりと思かたちのみるかひ有う
つくしきによろつのかみゆるしてあけくれのみ物にしたりすこしうちはらひ
給おりはめつらしくめてたき物に思へり九月になりて此あま君はつせにまうつ
としころいと心ほそき身にこひしき人のうへも思やまれさりしをかくあらぬ人
ともおほえ給はぬなくさめをえたれはくわんをんの御するしうれしとてかへり
申たちてまうて給なりけりいさ給へひとやはしらむとするおなし仏なれとさや
うの所にをこなひたるなむしるしありてよきためしおほかるといひてそゝのか
し立れとむかしはゝ君めのとなのかやうにいひしらせつゝたひ／＼まうてさ
せしをかひなきにこそあめれ命さへ心かなはすたくひなきいみしきめをみる
はといと心うきうちにもしらぬ人にくしてさるみちのありきをしたらんよと空
おそろしくおほゆ心こはきさまにはいひもなさて心ちのいとあしうのみ侍れは
さやうならんみちの程にもいかゝなとつゝましうなむとの給ふ物おちはさもし
給へき人そかしと思てしあてもいさなはす

はかなくて世にふる河のうきせには尋もゆかし二もとの杉とてならひにま
しりたるをあま君みつけてふたもとほまたもあひきこえんと思給人あるへしと
たはふれことをいひあてたるにむねつふれておもてあかめ給へるとあい行つ

きうつくしけなり

ふる河の杉の本たちしらねとも過にし人によそへてそみることなることな

きいらへをくちとくいふしのひてといへとみな人したひつゝこゝには人すくな
にておはせんを心くるしかりて心はせある少将のあま左衛門とてあるおとなし
き人わらははかりそとゝめたりけるみないてたちけるをなかめいてゝあさまし
きことを思なからも今はいかゝせむとたのもし人に思ふ人ひとり物し給はぬは
心ほそくもあるかなといとつれゝなるに中将の御ふみあり御らんせよといへ
ときゝもいれ給はすいとゝ人もみえずつれゝときしかた行ききを思くむし給
ふくるしきまでもなかめさせ給かな御五をうたせ給へといふいとあやしうこそ
はありしかとはの給へとうたむとおほしたれはゝむとりにやりてわれはと思て
せんせさせたてまつりたるにいとこよなければ又てなをしてうつあまうへとう
かへらせ給はなん此御五みせたてまつらむかの御五そいとつよかりしそうつの
君はやうよりいみしうこのませ給てけしうはあらすとおほしたりしをいときせ
い大とこになりてさしいてゝこそうたさめ御五にはまけしかしときこえ給し
につゐにそうつなんふたつまけ給しきせいか五にはまさせ給へきなめりあな
いみしとけうすれはさたすきたるあまひたいのみつかぬに物このみするにむつ
かしきこともしそめてける哉と思て心ちあしとてふし給ぬ時ゝはれゝしう
もてなしておはしませあたら御身をいみしうしつみてもてなさせ給こそくちお
しう玉にきすあらん心ちし侍れといふ夕暮の風の音もあはれなるに思いつるこ
ともおほくて

心には秋の夕をわかねともなかむる袖に露そみたるゝ月さしいてゝおかし
き程にひるふみありつる中将おはしたりあなうたてこはなにそとおほえ給へは
おくふかく入給をさもあまりにもおはします物かな御心さしのほともあはれま
さるおりにこそ侍めれほのかにもきこえ給はんこともきかせ給へしみつかんこ
とのやうにおほしめしたるこそなといふにいとはしたなくおほゆおはせぬよし
をいへとひるのつかひのひと所なととひきゝたるなるへしいとことおほくうら
みて御こゑもきゝ侍らしたゝけちかくてきこえんことをきゝにくしともいかに
ともおほしことはれとよろつにいひわひていと心うく所につけてこそ物のあは
れもまされあまりかゝるはなとあはめつゝ

山里の秋の夜ふかきあはれをもゝの思ふ人は思こそしれをのつから御心も

かよひぬへきをなとあれはあま君おはせてまきらはしきこゆへき人も侍らすい
とよつかぬやうならむとせむれは

憂物と思もしらてすぐ身を物おもふ人とひとはしりけりわさといらへと

もなきをきゝつたへきこゆれはいとあはれと思て猶たゝいさゝかいて給へときこえうこかせとこの人々をわりなきまでうらみ給あやしきまでつれなくそみえ給やとていりてみれば例はかりそめにもさしのそき給はぬ老人の御かたにいり給にけりあさましう思てかくなるときこゆれはかゝる所になかめ給らん心のうちのあはれにおほかたのありさまなともなさけなかるましき人のいとあまり思しらぬ人よりもけにもてなし給めるこそそれ物こりし給へるか猶いかなるさまに世をうらみていつまでおはすへき人そなどありさまとひていとゆかしけにのみおほいたれとこまかなることはいかてかはいひきかせんたゝしりきこえ給へき人のとし比はうとくしきやうにてすくし給しを初せにまうてあひ給て尋きこえ給つるとそいふひめ君はいとむつかしとのみきくおい人のあたりにうつふしゝゝていもねられすよひまとひはえもいはすおとろくしきいひきしつゝまへにもうちすかひたるあまともふたりふしてをとらしといひきあはせたりいとおそろしうこよひこの人々にやくはれなんとおもふもおしからぬ身なれとれいの心よはさはひとつはしあやうかりてかへりきたりけん物のやうにわひしくおほゆこもきともゐておはしつれと色めきてこのめつらしきおとこのえんたちゐたるかたにかへりゐにけりいまやくくゝと待ゐたまへれといとはかなきたのもし人なりや中将いひわつらひてかへりにければいとなさけなくむもれてもおはしますかなあたら御かたちをなとそしりてみなひと所にねぬ夜なかはかりにやなりぬらんと思ほとにあま君しはふきおほゝれておきにたりほかけにかしらつきはいとしろきにくろき物をかつきてこのきみのふし給へるあやしかりていたちとかいふなる物かさるわさするひたひにてをあてゝあやしこれはたれそとしふねけなるこゑにてみおこせたるさらにたゝいまくひてむとするとそおほゆるおにのとりもてきけん程は物のおほえさりければ中く心やさしいかさまにせんとおほゆるむつかしさにもいみじきさまにていきかへり人になりて又ありし色くゝのうきことを思ひみたれむつかしともおそろしとも物をおもふよしなましかはこれよりもおそろしけなる物の中にこそはあらましかと思やらる昔よりのことをまとろまれぬまゝにつねよりも思つゝくるにいと心うくおやときこえけん人の御かたちもみたてまつらすはるかなるあつまをかへるく年月をゆきてたまさかに尋よりてうれしたのもしと思きこえしはらからの御あたりをもおもはずにてたえすきさるかたに思さため給し人につけてやうく身のうさをもなくさめつへきゝはめにあさましうもてそこなひたる身を思もてゆけは

宮をすこしもあはれとおもひきこえけん心そいとけしからぬたゝこの人の御ゆかりにさすらへぬるそとおもへはこしまの色をためしに契給しをなとておかしと思きこえけんとかよなくあきにたる心ちすはしめよりうすきなからものとかに物し給し人はこのおりかのおりなと思ひいつるそこよなかりけるかくてこそありけれときゝつけられたてまつらむはつかしさは人よりまさりぬへしさすかにこの世にはありし御さまをよそなからたにいつかみんするとうち思猶わろの心やかくたにおもはしなと心ひとつをかへさふからうして鳥のなくをきゝていとうれしはゝの御こゑをきゝたらむはましていかならむと思あかして心ちもいとあしともにてわたるへき人もとみにこねは猶ふし給つるにいひきの人はいとどくおきてかゆなとむつかしきことゝもをもてはやしておまへにとくきこしめせなとよりきていへとまかなひもいとゝ心つきなうたてみしらぬ心ちしてなやましくなるとことなしひ給をしひていふもいとこちなしけすゝしきほうしはらなとあまたきてそうつけふおりさせ給へしなどにはかにはとふなれは一品宮の御物のけになやませ給ける山のさすみすほうつかまつらせ給へと猶そうつまいらせ給はてはしるしなして昨日二たひなんめし侍し右大臣殿の四位の少将よへ夜ふけてなんのほりおはしましてきさいの宮の御文なと侍ければおりさせ給なりなといとはなやかにいひなすはつかしうともあひてあまになし給てよといはんさかしら人すくなくてよきおりにこそと思へはおきて心ちのいとあしうのみ侍を僧都のおりさせ給へらんにいむことうけ侍らんなむ思侍をさやうにきこえ給へとかたらひ給へはほけゝしう打うなつく例のかたにおはしてかみはあま君のみけつり給をこと人にてふれさせんもうたておほゆるにてつからはたえせぬことなれはたゝすこしときくたしておやに今一たひかうなからのさまをみえすなりなむこそ人やりならすいとかなしけれいたうわつらひしけにやかみもすこしおちほそりたる心ちすれとなにはかりもおとろへすいとおほくて六尺はかりなるすゑなとそいとうつくしかりけるすちなともいとこまかにうつくしけなりかゝれとてしもとひとりこちゐ給へりくれかたにそうつものし給へりみなみおもてはらひしつらひてまるなるかしらつきゆきちかひさはきたるも例にかはりていとおそろしき心ちすはゝの御かたにまいり給ていかにそ月比はなといふひんかしの御方は物まうてし給にきとかこのおはせし人はなをものし給やなとゝひ給しかこゝにとまりてなん心ちあしとこそ物し給ていむことうけたてまつらんと給つるとかたるたちてこなたにいましてこゝにやおはしますとてき丁のもとにいる給へはつゝましけれとゐさりよりていらへし給ふ

いにてみたてまつりそめてしもさるへき昔の契ありけるにこそと思給へて御いのりなどもねんころにつかうまつりしをほうしはその事となくて御ふみきこえうけ給はらむもひんなければしねんになんをろかなるやうになり侍ぬるいとあやしきさまによをそむき給へる人の御あたりいかておはしますらんの給世中に侍らしと思たち侍し身のいとあやしくていまゝて侍つるを心うしと思侍物からよろつにせさせ給ける御心はえをなむいふかひなき心ちにも思給へしらるゝを猶よつかすのみつゐにえとまるましく思給へらるゝをあまになさせ給てよ世中に侍とも例の人にてなからふへくも侍らぬ身になむときこえ給まいとゆくさきとをけなる御程にいかてかひたみちにしかはおほしたゝむかへりてつみある事也思立て心をおこし給ほとはつよくおほせと年月ふれは女の御身といふ物いとたい／＼しき物になんとのたまへはをさなく侍しほとより物をのみ思へき有さまにておやなどもあまになしてやみましなとなむ思の給しましてすこしもの思しりて後は例の人さまならてのちの世をたにと思心ふかゝりしをなくなるへき程のやう／＼ちかくなり侍にや心ちのいとよはくのみなり侍を猶いかてとてうちなきつゝの給あやしくかゝるかたちありさまをなとて身をいとはしく思はしめ給けん物のけもさこそいふなりしかと思あはするにさるやうこそはあらめいまゝてもいきたるへき人かはあしき物のみつけそめたるにいとおそろしくあやうきことなりとおほしてとまれかくまれおほしたちての給を三ほうのいとかしこくほめ給こと也ほうしにてきこえかへすへきことにあらず御いむことはいとやすくさつたてまつるへきをきふなることにまかんでたれはこよひかの宮にまいるへく侍りあすよりやみすほうはしまるへく侍らん七日はてゝまかてむにつかまつらむとの給へはかのおま君おはしなはかならずいひさまたけてんといとくちおしくてみたり心ちのあしかりし程にみたるやうにていとくるしう侍れはをもくならはいむことかひなくや侍らん猶けふはうれしきおりとこそ思ひ侍れとていみしうなき給へはひしり心にいと／＼おしく思てよやふけ侍ぬらん山よりおり侍こと昔はことゝもおほえ給はさりしを年のおうるまゝにはたへかたく侍けれはうちやすみてうちにはまいらんと思侍をしかおほしいそくことなれはけふつかうまつりてんとの給にいとうれしくなりぬはさみとりてくしのはこのふたさしいてたれはいつら大とこたちこゝにとよふはしめみつけたてまつりしふたりなからともにありければよひいれて御くしおろしたてまつれといふけにいみしかりし人の御有さまなれはうつし人にてはよにおはせんもうたてこそあらめとこのあさりもことはりに思にき丁のかたひらのほころひより御か

みをかきいたし給つるかいとあたらしくおかしけなるになむしはしはさみをも
てやすらひけるかゝるほど少将のあまはせうとのあさりのきたるにあひても
にゐたりさゑもんはこのわたくしのしりたる人にあいしらふとてかゝる所にと
りてはみなとりく心よせの人ゝめつらうていてきたるにはかなき事しけ
るみいれなとしけるほどにこもき独してかゝることなんと少将のあまにつけ
りければまとひてきてみるにわか御うへのきぬけさなどをことさら許とてきせ
たてまつりておやの御かたおかみたてまつり給へといふにいつかたもしらぬ
ほとなむえしのひあへ給はてなき給にけるあなあさましやなとかくあふなきわ
さはせさせ給うへかへりおはしてはいかなることをの給はせむといへとかはか
りにしそめつるをいひみたるも物しと思てそうついさめ給へはよりてもえさま
たけするてん三かいちうなといふにもたちはてゝし物をとるもさすかな
りけり御くしもそきわつらひてのとやかにあま君たちしてなをさせ給へといふ
ひたひはそうつそゝき給かゝる御かたちやつし給てくひ給なゝとたうときこと
ゝもとききかせ給とみにせさすへくもあらずみないひしらせ給へることをうれ
しくもしつるかなとこれのみそ仏はいけるしありてとおほえ給けるみな人
ゝいてしつまりぬよるの風のをとにこの人ゝは心ほそき御すまひもしはしの事
そ今いとめてたくなり給なんとたのみきこえつる御身をかくしなさせ給てのこ
りおほかる御世のすゑをいかにせさせ給はんとするそおひおとろへたる人たに
今はかきりと思はてられていとかなしきわさに侍といひしらすれと猶たゝ今は
心やすくうれし世にふへき物とは思かけすなりぬるこそはいとめてたきことな
れとむねのあきたる心ちそし給けるつとめてはさすかに人のゆるさぬことなれ
はかはりたらむさまみえんもいとつかしくかみのすそのにはかにおほとれた
るやうにしとけなくさへそかれたるをむつかしきことゝもいはてつくろはん人
もかなと何事につけてもつゝましくてくらうしなしておはす思ふ事を人にいひ
つゝけんことのはゝもとよりたにはかゝしからぬ身をまいてなつかしうこと
はるへき人さへなければたゝすゝりにむかひて思あまるおりにはてならひをの
みたけきことゝはかきつけ給

なきものに身をも人をも思つゝ捨てし世をそさらにすてつる今はかくてか
きりつるそかしとかきても猶身つからいとあはれとみたまふ

かきりそと思なりにし世間を返くもそむきぬるかなおなしすちのことを
とかくかきすさひる給へるに中将の御文あり物さはかしうあきれたる心ちしあ
へる程にてかゝることなどいひてけりいとあへなしと思てかゝる心のふかくあ

りける人なりければはかなきいらへをもしそめしと思はなるゝ成けりさてもあるへなきわさかないとおかしくみえしかみのほどをたしかにみせよとひと夜もかたらひしかはさるへからむおりにといひしものをといとくちおしうて立かへりきこえんかたなきは

きし遠く漕はなるらむあま舟に乗をくれしといそかるゝかな例ならすとりてみ給物のあはれなるおりにいまはと思もあはれなる物からいかゝおほさるらんにとはかなきものゝはしに

心こそうき世の岸をはなるれと行ゑもしらぬあまのうき木をとれいのてな

らひにし給へるをつゝみてたてまつるかきうつしてたにこそとの給へと中ゝかきそこなひ侍なんとてやりつめつらしきにもいふかたなくかなしうなむおほえける物まうての人かへり給て思さはき給ことかきりなしかゝる身にてはすゝめきこえんこそはと思なし侍れとのこりおほかる御身をいかてへたまはむとすらむをのれは世に侍らんことけふあすともしりかたきにいかてうしろやすくみたてまつらむとよろつに思給へてこそ仏にも祈きこえつれとふしまろひつゝいといみしけに思給へるにまことのおやのやかてからもなき物と思まとひ給けんほとおしはからるゝそまいつとかなしかりける例のいらへもせてそむき給へるさまいとわかくうつくしけなれはいと物はかなくそおはしける御心なれとなくゝ御そのことなといそき給にひ色はてなれにしことなれはこうちきけさなとしたりある人ゝもかゝる色をぬいきせたてまつるにつけてもいとおほえすうれしき山里のひかりとあけくれみたてまつりつる物を口おしきわさかなとあたらしかりつゝ僧都をうらみそしりけり一品宮の御なやみけにかの弟子のいひしもしるくいちしるきことゝもありてをこたらせ給にければいよくいとたうとき物にいひのゝしる名残もおそろしとてみすほうのへさせ給へはとみにもえかへりいらてさふらひ給に雨なとふりてしめやかなる夜めしてよゐにさふらはせ給日ころいたうさふらひこうしたる人はみなやすみなどしておまへに人すくなにてちかくおきたる人すくなきおりにおなし御丁におはしまして昔よりのませ給中にも此たひなんいよく後の世もかくこそはとたのもしきことまさりぬるなどの給はす世の中に久しうはへるまじきさまに仏などもをしへ給へることゝも侍るうちにことしらい年すくしかたきやうになむ侍れば仏をまきれなくねんしつとめ侍らんとてふかくこもり侍をかうおほせことにてまかりいて侍にしなとけいし給御ものゝけのしふねきことをさまゝになのるかおそろしきことなどの給つゐてにいとあやしうけうのことをなんみ給へしこの三月に年老て

侍は、の願有てはつせにまうて、侍しかへさの中やとりにうちの院といひ侍所にまかりやとりしをかくのこと人すまて年へぬるおほきなる所はよからぬ物かならずかよひすみておもきひやうさのためあしき事ともと思給へしもしるくてかのみつたりしこと、もをかたりきこえ給けにいとめつらかなることかなとてちかくさふらふ人ゝみなねいりたるをおそろしくおほされておとろかさせ給大将のかたらひ給さい将の君しもこのことをき、けりおとろかさせ給人ゝはなにもきかす僧都おちさせ給へる御けしきを心もなきことけいしてけりと思てくはしくもその程のことをはいひさしつその女人このたひまかりいて侍つるたよりにをのに侍つるあまともあひとひ侍らんとてまかりよりたりしになくくゝ出家の心さしふかきよしねん比にかたらひ侍しかはかしらおろし侍にきなにかしかいもうと故ゑもんのかみのめに侍しあまなんうせにし女このかはりと思よろこひ侍てすいふんにいたはりかしつき侍けるをなくなりたれはうらみ侍なりけにそかたちはいとうるはしくけうらにてをこなひやつれんもおしけになむ侍しなににか侍けんともよくいふそうつにてかたりつ、け申給へはいかてさる所によき人をしもとりもていきけんさりとも今はしられぬらむなとこのさい相の君そとふしらすさもやかたらひ給らんまことにやむことなき人ならはなにかかくれも侍らしをやゑ中人のむすめもさるさましたるこそは侍らめりうの中より仏むまれ給はすはこそ侍らめたゝ人にてはいとつみかろきさまの人になん侍けるなときこえ給そのころかのわたりにきえうせにけむ人をおほしいつこのおまへなる人もあねの君のつたへにあやしくてうせたる人とはき、をきたれはそれにやあらんとは思けれとさためなきこと也そうつもかゝる人世にある物としられしとよくもあらぬかたきたちたる人もあるやうにおもむけてかくししのひ侍をことのさまのあやしけれはいし侍なりとなまかくすけしきなれば人にもかたらず宮はそれにもこそあれ大将にきかせはやと此人にその給はすれといつかたにもかくすへきことをさためてさならむとしらすなからはつかしけなる人にうちいての給はせむもつゝましくおほしてやみにけりひめ宮をこたりはてさせ給てそうつものほりぬかしこにより給へれはいみしうらみて中くゝかゝる御ありさまにてつみもえぬへきことをの給もあはせすなりにけることをなむいとあやしきなどの給へとかひもなし今はたゝ御をこなひをし給へおいたるわかきさためなきよなりはかなき物におほしとりたるもことはりなる御身をやとの給にもいとはつかしうなむおほえける御ほうふくあたらしくし給へとてあやうす物きぬなといふ物たてまつりをき給なにかしか侍らんかき

りはつかうまつりなんなにかおほしわつらふへきつねの世において、せけんのゑいくわにねかひまつはるゝかきりなん所せくすてかたくわれも人もおほすへかめることなめるかゝる林の中にをこなひとつめ給はん身はなにことかはうらめしくもはつかしくもおほすへきこのあらん命は葉のうすきかことしといひしらせて松門に暁いたりて月徘徊すとほうしなれといとよし／＼しくはつかしけなるさまにての給ことゝもを思やうにもいひきかせ給かなときゝゐたりけふはひねもすにふく風の音もいと心ほそきにおはしたる人もあはれ山ふしはかゝる日にそねはなかるなるかしといふをきゝて我も今は山ふしそかしことはりにとまらぬ涙なりけりと思つゝはしのかたに立いてゝみれははるかなる軒はよりかりきぬすかた色ゝに立ましりてみゆ山へのほる人なりとてもこなたのみにかはかよふ人もいとたまさかなりくろたにとかいふ方よりありくほうしのあとのみまれ／＼はみゆるを例のすかたみつけたるはあひなくめつらしきにこのうらみわひし中将なりけりかひなきこともいはむとて物したりけるを紅葉のいとおもしろくほかのくれなゐにそめましたる色ゝなれはいりくるよりそ物あはれなりけるこゝにいと心ちよけなる人をみつけたらあやしくそおほゆへきなど思ていとまありてつれ／＼なる心ちし侍にもみちもいかにと思給へてなむ猶立かへりてたひねもしつへきこのもとにこそとてみいたし給へりあま君例の涙もろにて

木枯の吹にし山のふもとには立かくすへきかけたにそなきとの給へは

待人もあらしとおもふ山里の梢をみつゝ猶そ過うきいふかひなき人の御こ

とをなをつきせずの給てさまかはり給へらんさまをいさゝかみせよと少将のあまにの給それをたにちきりしるしにせよとせめ給へはいりてみるにことさら人にもみせまほしきさましてそおはするうすきにひ色のあやなかにはくわんさうなとすみたるいろをきていとさゝやかにやうたひおかしくいまめきたるかたちにかみはいつへのあふきをひろけたるやうにこちたきすゑつき也こまかにうつくしきおもやうのけさうをいみしくしたらむやうにあかくにほひたりをこなひなどをしたまふも猶すゝはちかきぎちやうにうちかけて経に心をいれてよみ給へるさまゑにもかゝまほしうちみることに涙のとめかたき心ちするをまいて心かけ給はんおとこはいかにみたてまつり給はんと思てさるへきおりにや有けむさうしのかけかねのもとにあきたるあなをゝしへてまきるへき木丁などおしやりたりいとかくは思はすこそ有しかいみしく思さまなりける人をと我したらむあやまちのやうにおしくゝやしうかなしければつゝみもあへす物くるはしき

まてけはひもきこえぬへければのきぬかはかりのさましたる人をうしなひてたつねぬ人ありけんや又その人かの人のむすめなん行ゑもしらすかくれにたるもしは物えんしして世をそむきにけるなどをのつからかくれなかるへきをなとあやしう返々思あまなりともかゝるさましたらむ人はうたてもおほえしなど中

くみ所まさりて心くるしかるへきをしのひたるさまに猶かたらひとりてんと思へはまめやかにかたらふよのつねのさまにはおほしはゝかることも有けんをかゝるさまになり給にたるなん心やすうきこえつへく侍さやうにをしへきこえ給へきし方のわすれかたくてかやうにまいりくるに又今ひとつ心さしをそへてこそなどの給いに行すゑこゝろほそくうしろめたき有さまに侍にまめやかなるさまにおほし忘れすとはせ給はんいとうれしうこそ思給へをかね侍らさらむ後なんあはれに思給へらるへきとてなき給にこのあま君もはなれぬ人なるへしたれならむと心えかたし行すゑの御うしろみはいのちもしりかたたくたのもしけなき身なれとさきこえそめ侍なればさらにかはり侍へらし尋きこえ給へき人はまことにものし給はぬかさやうのこのおほづかなきになんはゝかるへきことに侍らねとなをへたてある心ちし侍へきとの給へは人にしらるへきさまにて世にへたまはゝさもや尋いつる人も侍らん今はかゝる方に思きりつる有さまになん心のおもむけもさのみみえ侍つるをなとかたらひ給こなたにもせうそこし給へり

大かたの世をそむきける君なれといとふによせて身こそつられねん比に

ふかくきこえ給ことなといひつたふはらからとおほしなせはかなき世の物かたりなどきこえてなくさめむなどいひつゝく心ふかからむ御物かたりなどきゝわくへくもあらぬこそ口おしけれといらへてこのいとふにつけたるいらへはし給はす思よらすあさましきこともありし身なれはいとうとましすへてくちきなどのやうにて人にみすてられてやみなむともてなし給されは月ころたゆみなくむすほゝれ物をのみおほしたりしもこのほいの事し給てよりのちすこしはれくしうなりてあま君とはかなくたはふれもしかはし五うちなどしてそあかしくらし給をこなひもいとよくして法華経はさら也ことほうもんなともいとおほくよみ給雪深くふりつみ人めたえたる比そけに思やるかたなかりける年もかへりぬ春のしるしもみえずこほりわたれる水の音せぬさへ心ほそくて君にそまふとの給し人はこゝろうしと思はてにたれと猶そのおりなどのことはわすれすかきくらす野山の雪をなかめてもふりにしことそけふもかなしきなど例の

なくさめの手習をゝこなひのひまにはし給われ世になくて年へたゝりぬるを思

いつる人もあらむかしなと思出る時もおほかりわかなをおろそかなるこにいれて人のもてきたりけるをあま君みて

山里の雪まのわかなつみはやし猶おいさきのたのまるゝかなとてこなたにたてまつれ給へりければ

雪ふかき野へのわかなも今よりは君かためにそ年もつむへきとあるをさそ
おほすらんとあはれなるにもみるかひ有へき御さまと思はましかはとまめやかにうらない給ねやのつま近きこうはいの色も香もかはらぬを春や昔のこと花よりもこれに心よせのあるはあかさりにほひのしみにけるにやこやにあかたてまつらせ給けらうのあまのすこしわかきかあるめしいてゝ花おらすればかことかましくちるにいとゝにほひくれは

袖ふれし人こそみえね花の香のそれかとにほふ春の明ほのおほあま君のむ

まこのきのかみなりけるこの比のほりてきたり卅はかりにてかたちきよけにほりかなるさましたりなにかこそおとゝしなと問にほけくしきさまなれはこなたにきていとこよなくこそひかみ給にけれあはれにもはへるかなのこりなき御さまをみたてまつることかたくてとをき程に年月をすくし侍よおやたち物し給はて後はひと所をこそ御かはりに思きこえ侍つれひたちの北の方はをとつれきこえ給やといふはいもうとなるへし年月にそへてはつれくにあはれなることのみまさりてなむひたちはひさしうをとつれきこえ給はさめりえ待つけれましきさまになむみえ給との給にわかおやの名とあひなくみゝとまれるに又いふやうまかりのほりて日比になり侍ぬるをおほやけことのいとしけくむつかしうのみ侍にかゝつらひてなんきのふもさふらはんと思給へしを右大将殿の宇治におはせし御ともにつかうまつりて故八の宮のすみ給し所におはして日くらし給しこみやの御むすめにかよひ給しをまつひと所は一とせうせ給にきその御おとうと又忍てすへたてまつり給へりけるをこそ春又うせ給にければその御はてのわさせさせ給はんことかの寺のりしになんさるへきことの給はせてなにかしもの女のさうそくくたりてうし侍へきをせさせ給てんやをらすへき物はいそきせさせ侍なんといふを聞にいかてかあはれならさらむ人やあやしとみむとつゝましうておくにむかひてあ給へりあま君かの聖のみこの御むすめはふたりときゝしを兵部卿宮の北の方はいつれそとの給へはこの大将殿の御のちのはおとりはらなるへしことくしうもゝてなし給はさりけるをいみしうかなしひ給ふなりはしめのはたいみしかりきほとく出家もし給つへかりきかしなとかたるかのわたりのしたしき人なりけりとみるにもさすかおそろしあやしくや

うの物とかしこにてしもうせ給けることきのふもいとふひんに侍しかな河ちかき所にて水をのそき給ていみしうなき給きうへのほり給てはしらにかきつけ給し

みし人は影もとまらぬ水の上に落そふ涙いと、せきあへすとなむ侍しことにあらはしての給ことはすくなけれどたゝ氣色にはいとあはれなる御さまになんみえ給し女はいみしくめてたてまつりぬへくなんはかく侍し時よりいうにおはしますとみたてまつりしみにしかは世中の一の所もなにも思侍らすたゝこの殿をたのみきこえてなんすくし侍ぬるとかたるにことにふかき心もなけなるかやうの人たに御有さまはみしりにけりと思あま君ひかる君ときこえけん故院の御有さまにはならひ給はしとおほゆるをたゝ今の世にこの御そうそめてられ給なる右の大殿とゝの給へはそれはかたちもいとうるはしうけうらにすうとくにてきはことなるさまそし給へる兵部卿宮そいといみしうおはするや女にてなれつかうまつらはやとなんおほえ侍などをしへたらんやうにいひつゝくあはれにもおかしくも聞に身の上もこの世のことゝもおほえすとゝこほることなくかたりをきて出ぬ忘給はぬにこそはとあはれに思にもいとゝはゝ君の御心のうちをしはかるれと中／＼いふかひなきさまをみえきこえたてまつらむは猶つゝましくそ有けるかの人のいひつけし事ともをそめいそくをみるにつけてもあやしうめつらかなる心ちすれとかけてもいひいてられすたちぬいなどするをこれ御らんしいれよ物をいとうつくしうひねらせ給へはとてこうちきのひとへたてまつるをうたておほゆれは心ちあしとて手もふれすふし給へりあまきみいそくことをうちすてゝいかゝおほさるゝなど思みたれ給紅に桜のをり物のうちきかさねておまへにはかゝるをこそたてまつらすへけれあさましきすみそめなりやといふ人あり

あま衣かはれる身にやありしよのかたみに袖をかけてしのはんとかきていとおしくなくもなりなん後に物のかくれなき世なりければきゝあはせなどとしてうとましまてにかくしけるなどや思はんなどさま／＼思つゝ過にし方のことはたえて忘れ侍にしをかやうなることをおほしいそくにつけてこそほのかにあはれなれとおほとかにの給さりともおほしいつことはおほからんをつきせすへたて給こそ心うけれ身にはかゝるよのつねの色あひなとひさしく忘れにければなを／＼しく侍につけても昔の人あらましかはなと思出侍るしかあつかひきこえ給けん人よにおはすらんやかてなくなしてみ侍したに猶いつこにあらむのことたに尋きかまほしくおほえ侍を行ゑしらて思ひきこえ給人ゝ侍らむかしと

の給へはみし程まではひとり物は給きこの月比うせやし給ぬらんとて涙のおつるをまきはして中／＼思出るにつけてうたて侍れはこそえきこえ出ねへたてはなにことにかのこし侍らむとことすくなにの給なしつ大将はこのはてのわさなとせさせ給てはかなくてやみぬるかなとあはれにおほすかのひたちのこともはかうふりしたりしはくら人になしてわか御つかさのそうになしなといったはり給けりわらはなるか中にきよけなるをはちかくつかひならさむとそおほしたりける雨なとふりてしめやかなる夜きさひの宮にまいり給へり御まへのとやかなる日にて御物かたりなときこえ給つゐてにあやしき山里に年ころまかりかよひみ給へしを人のそしり侍しもさるへきにこそはあらめたれも心のよる方のことはさなむあると思給へなしつゝ猶時々みたまへしを所のさかにやと心うく思給へなりにし後は道もはるけき心ちし侍てひさしう物し侍らぬをさいつ比物のたよりにまかりてはかなきよの有さまとり重て思給へしにことさら道心おこすへくつくりをきたりける聖の棲となんおほえ侍しとけいし給にかのことおほしいて、いと／＼おしければそこにはおそろしき物やすむらんいかようにてか彼人はなくなりにしとはせ給ふをなをつゝきをおほしよる方と思てさも侍らなさやうの人はなれたる所はよからぬ物なんかならすすみつき侍をうせ侍にしさまもなんいとあやしく侍るとてくはしくはきこえ給はす猶かくしのふるすちをきゝあらはしけりと思給はんかいとおしくおほされ宮の物をのみおほしてその比はやまるになり給しをおほしあはするにもさすかに心くるしうてかた／＼にくちいれにくき人のうへとおほしとゝめつこさいしやうに忍ひて大将かの人のことをいとあはれと思ての給しにいとおしうてうちいてつへかりしかとそれにもあらさらむ物ゆへとつゝましうてなん君そことゝきゝあはせけるかたはならむことはとりかくしてさることなんありけると大方の物語のついでにそうつのいひしことをかたれとの給はすおまへにたにつゝませ給はむことをましてひと人はいかてかときこえさすれとさま／＼なることにこそ又まろはいとおしきことそあるやとのたまはするも心えておかしとみたてまつる立よりものかたりなどし給ふつゐてにいひいたりめつらかにあやしとかおとろかれ給はさらむ宮のとはせ給いしもかゝることをほのおほしよりてなりけりなどかのたまはせはつましきとつられとわれも又はしめよりありしさまのこときこえそめさりしかはきゝて後も猶おこかましき心ちして人にすへてもらさぬを中／＼外にはきこゆることもあらむかしうつゝの人々の中に忍ることたにかくれあるよの中かはなと思ひりて此人にもさなむありしなとあかし給はんことは猶

くちをもき心ちして猶あやしと思し人のことに、ても有ける人のありさまかな
さて其人は猶あらんやとの給へはかのそうつの山よりいてし日なむあまになし
つるいみしうわつらいし程にもみる人おしみてせさせさりしをさうしみのほい
ふかきよしをいひてなりぬるところ侍なりしかといふ所もかはらすそのころの
有さまと思あはするにたかふふしなければまことにそれと尋いてたらんいとあ
さましき心ちもすへきかないかてかはたしかにきくへきおりたちて尋ありかん
もかたくなしなどや人いひなさん又彼宮もき、つけ給へらんにはかならずおほ
しいて思いりにけん道もさまたけ給てんかしさてさなの給いそなときこえを
き給ければやわれにはさることなんき、しとさるめつらしきことをきこしめし
なからの給はせぬにやありけん宮もか、つらひ給ふにてはいみしうあはれと思
なからもさらにやかてうせにし物と思なしてをやみなんうつし人になりて末の
世にはきなるいつみのほとりはかりを、のつかからひよる風のまきれもあ
りなん我ものにとり返しみんなの心ち又つかはしなと思みたれて猶のたまはすや
あらんとおほゆれと御けしきのゆかしければ大宮にさるへきつゝあてつくりいた
してそけいし給あさましうてうしなひ侍ぬと思給へし人よにおちあふれてある
やうに人のまねひ侍しかないかてかさることは侍らんとおもひ給れと心とおと
ろくしうもてはなる、ことは侍らすやと思わたり侍人のありさまにはへれは
人のかたり侍へしやうにてはさるやうもや侍らむとにつかはしく思給へらる、
とて今すこしきこえて給宮の御ことをいとはつかしけにさすかにうらみたる
さまにはいひなし給はてかのことまたさなるとき、つけ給へらはかたくなにす
きくしうもおほされぬへし更にさてありけりともしらすかほにてすくし侍な
んとけいし給へはそうつのかたりしにいとものおそろしかりしよのことにて耳
もと、めさりしことにこそ宮はいかてかき、給はむきこえん方なかりける御心
のほのかなときけはましてき、つけ給はんこそいとくるしかるへけれか、るす
ちにつけていとかろくうき物にのみ世にしられ給ぬめれは心うくなとの給はす
いとをもき御心なれはかならずしもうちとけよかたりにても人の忍てけいしけ
んことをもらさせ給はしなとおほす、むらん山里はいつこにかはあらむいかに
してさまあしからす尋よらむ僧都にあひてこそはたしかなる有さまもき、あは
せなとしてともかくもとふへかめれなとた、此事をおきふしおほす月こと八
日はかならずたうときわさせさせ給へはやくし仏によせたてまつるにもてなし
給つるたよりに中たうに時くまいり給けりそれよりやかて横川におはせんと
おほしてかのせうとのわらはなるゐておはすその人々にはとみにしらせし有さ

まにそしたかはんとおほせとうちみむ夢の心ちにもあはれをもくはへむとにや
ありけんさすかにその人とはみつけなからあやしきさまにかたちことなる人の
なかにてうきことをきゝつけたらんこそいみしかるへけれとよろつにみちすか
らおほしみたれけるにや